

## クリスマス講筈

## 光・愛・生命——クリスマスの恵み

2003年12月21日（京都KKRくに荘）

## シメオンの預言

聖書には、クリスマスのことはほんの少ししか書かれていません。ルカ伝第2章は、キリストの誕生のところを簡潔に記しています。その前の第1章では、どうしてヨハネが生まれたか、それから、マリアさんがどのようにして聖霊によつて身ごもり給うたかというくだりが書かれています。そして第2章にこのキリストの誕生ということが出てくるわけです。

この第2章は二つに分かれていまして、前半は非常に明るい記事です。羊飼いたちに御使が現れて、大空に、天に大合唱がおこった。羊飼いたちは喜びに満たされたという、非常に明るいことが書かれています。

ところが、後半部は非常に厳しいことが書かれています。シメオンという老人が——ただこのイエス・キリストという方に出会うためにのみ晩年を過ごした——聖霊の示しによつて、

幼子イエスがお父さんお母さんに抱かれて宮参りに来た時に、イエスに出会うわけです。そして言った言葉が、

「主よ、今こそ御言に循いて僕を安らかに逝かしめ給うなれ。わが目は、はや主の救を見たり。是もろもろの民の前に備え給いし者、異邦人を照らす光、御民イスラエルの栄光なり」（ルカ2・29～32）

ここまででは明るいんです。しかも、御民イスラエルの栄光のみならず、異邦人を照らす光であるという。私たちは異邦人です。イスラエルの民は、特別に神に選ばれて、そして長い歴史を通して救い主を世に送り出すという、そういう使命を賜ったわけです。ここまでは非常に明るいけれども、その次です。

「かく幼児に就きて語ることを、其の父母あやしみ居たれば、シメオン彼らを祝して母マリアに言う。『視よ、この幼児は、イスラエルの多くの人の、或いは倒れ、或いは起たん為に、また言い逆いを受くる徴のために置かる。剣、汝の心をも刺し貫くべし。これは多くの人の心の念の顕れん為なり』（ルカ2・33～35）

こういう実に不吉なことが預言されている。まだこれは40日目なんです。赤ちゃんが生まれて、40日目に、清めが終わったということでお宮参りをする。8日目に男の子には割礼という儀式をいたします。それから33日おいて、40日目に宮参りをするわけです。その日を

待ちかねたように、このシメオンという老人がつかつかと両親のところ近づいてきて、そして幼子を抱き取って祝福しながら、

「シメオン彼らを祝して」

とあります。だから、一方で祝福し、他方でこの

「視よ、この幼児は、イスラエルの多くの人の、或いは倒れ、或いは起たん為に」

という預言がなされた。キリストは「躓きの石、妨げの岩」です。この石は、これにぶつかって救われる人と、これにぶつかって滅びる人と、二つに分ける石です。

「或いは倒れ、或いは起たんために」

「起つ」というのは救われることです。「倒れる」というのは滅びることです。まあ、永遠の滅びではありませんでしょう。いったん滅びて後にまた救われるという、そういうことだと思えますけれども。とにかく、イスラエルの多くの人のあるいは倒れ、あるいは起たんために、また言い逆らうを受くる徴のために、キリストという石が置かれる。

誰が言い逆らうんですか。人間どもです。人間どもが、神様がせっかく送ってくださいったこの救い主、このイエスに逆らうんです。訳もなく逆らう。

「剣、汝の心をも刺し貫くべし」

と。マリアさんはお何歳くらいですか、おそらく20歳くらいだと思う。このマリアさんに向かって、しかも、祝福された初子を抱いているマリアさんに向かって

「剣があなたの胸を、心を、刺し貫きますよ」

という不吉な預言が語られている。そして

「これは多くの人の心の念の顕れん為なり」

と。我々人間の深層心理というものの、これが、人間を救うために来てくださった本ものに出会った時に、人間のどうにもならない業を引き受けて救おうとして現れてくださったお方を刺し貫く。十字架につけて殺す。これが現実に取りました。

福音書を見ますと、イエス・キリストは、本当にいいことばかりなさっている。本当にいいことばかりなさっていますよ。皆さん、ごらんください。多くの病に苦しんでいる人はことごとく癒されたと書いてありますし、一人息子を失って嘆き悲しんでいる母親とその棺が通りかかった時に、棺に手をかけて、

「若者よ、起きよ！」

と言われたら、若者が起きあがったということが書かれている。ラザロを甦らせたこともそうですし、

「タリタ、クミ！」（少女よ、起きよ）

と、ヤイロの12歳の娘を甦らせたこともある。それから、らい病人は清められ、目の見えな人の目は開かれ、足が萎えて立てなかった人は立ち上がるといふ、まさに、

「砂漠はよろこびてサフランの花のごとくにかがやかん」

というイザヤ書第35章の預言——これは天国の姿を描写した預言です——その天国的な事態をキリストは現に地上で現された。

これは天国の興味<sup>まえあじ</sup>だった。イエス・キリストがなさったことは、すべて微<sup>しる</sup>なんです。

「やがて神の国が到来する。最後の審判を経て本当の神の国が到来する。その時はこのようになるよ」

ということ、イエス・キリストは先取りしてお示しになった。

ところが、人々はそれを御利益<sup>ごりやく</sup>的にしか受けとらなかった。例えば、五つのパンと二匹の魚で五千人が飽<sup>あ</sup>いたというお話。イエス・キリストが夕暮れの丘の上でパンを祝福<sup>さく</sup>して割いて分かち与えたら、それが尽きないパンとなって五千人を満腹させ、しかも残りくずを集めたら12の籠<sup>かご</sup>に満ちあふれたという。「昔の人は馬鹿だからそのようなことを書いた」なんて、皆さん思わないでください。地上でただ一回きり起こった、神様の最後の御<sup>み</sup>わざ、それがイエス・キリストを通して顕されたんです。にもかかわらず、人々は、

「この方をつかまえておけば自分たちの食糧問題は解決する」

と思つて、王様にしようとした。あるいは、当時はローマの支配下にありましたから、

「ローマ皇帝は憎らしいやつだ。しかし、逆らえない。この植民地支配から脱却するには強力な王が必要だ。全能なる王が必要だ。ナザレのイエスならやってくれるかも知れない」

と思つて弟子たちは期待した。弟子ですらそういう見当違いのことをやっていますし、恵みを受けた民衆たちも、自分たちにとつて都合がいいからこの人を王様にしようという、そういう魂胆<sup>こんたん</sup>でしかない。誰ひとりとして、

「神の御心<sup>みこころ</sup>はいずこにありや。自分たち人間は何者なのか。自分たちはこれでいいのか」

という、本当の人間の生き方を心から求めようとしなかった。

イエス・キリストは本当の道を示そうとして来てくださった。

「我は道なり、真理<sup>まこと</sup>なり、生命<sup>いのち</sup>なり。我によらなければ誰も父の御許<sup>みもと</sup>に行くことはできない。」(ヨハネ14・6)

と言われた。天と地の梯<sup>かけはし</sup>となつて、本当に天から地に梯子<sup>はしご</sup>を降ろすようにして降<sup>くだ</sup>ってきてくださった。その方にしがみついて、全身全霊ですがりついて、全身全霊で方向転換して——これを「悔改<sup>くいあらた</sup>め」と言います——全身全霊で方向転換して、

「どうぞ助けてください」

とすがりつく。そういう者に対して、キリストは無条件に赦<sup>ゆる</sup>しておられる。

「おまえの過去は問わない。全部私が引き受けた。だから私に従<sup>したが</sup>っていらつしやい」

そう言って人々に呼びかけられたけれど、結局は、弟子もキリストを捨てた。民衆も、当時の祭司長、律法学者、あるいは大祭司、そういった宗教的権力、政治的権力、そういった者

たちに煽動<sup>せんどう</sup>されて、

「十字架につけろ、十字架につけろ！」

と言って、とうとう殺してしまった。そういう事実があるわけです。それを、このシメオン老人は赤ちゃんを見た時にそうやって預言をして、世を去っていく。

目に見えない霊なる神

世はクリスマスだと、「メリー クリスマス！」と言って騒いでいます。ランプが灯り<sup>とも</sup>、もみの木の形をかたどった電飾<sup>でんしよく</sup>がきらきらと輝いている。ジングルベルが鳴っている。しかし、そういうにぎやかな騒ぎの奥に、本当のキリストの誕生というのはどういうものであつたかということを誰が真剣に考えているだろうか、私は思わざるを得ない。

今、讃美歌を三曲歌いました。「諸人<sup>もろびと</sup>こぞりて迎えまつれ」(112)、「天には栄え」(98)、そして「あべツレヘムよ」(115)。この三曲を本当に魂を込めて歌えば、実に涙なくして歌えないですよ。イエス・キリストという方は何のために地上に来てくださったのか。ただ我々を生かさんために、ただ神の御心を100%地上に現して、我々を生かさんために来てくださった。

私たちには神様なんて見えない。頭で想像はできても、ハートで感じ取ろうと努力しても、それは我々の主観が「これが神ではなからうか、こんなものじゃなからうか」と思い描く勝手な幻想にすぎません。

「真の神はこんな方だ」

と、それを体<sup>からだ</sup>をもつて現したお方、これがイエス・キリストなんです。

しかも、そのお生まれは、誰も知らない夜にひっそりとお生まれになった。生まれた時にはまともな部屋もなかった。ベツレヘムに上<sup>のぼ</sup>つてこられた。ナザレというのは北の方です。ナザレの処女<sup>おとめ</sup>マリアは、その許嫁<sup>いみなずけ</sup>のヨセフがダビデの家系だということでその本籍はベツレヘムの方にありますから、戸籍登録のために南のユダヤ地方のベツレヘムというダビデの町へ上つてきたわけです。そのベツレヘムで臨月を迎えてしまった。たくさんの方が上つてきますから、まともな宿屋が見つからない。そこで、馬槽<sup>うまぶね</sup>のなかにお生まれになった。馬槽ですよ。馬槽の中という、どん底のお生まれをなさった。

しかしながら、その方がお生まれになったということが我々人類の歴史の中でどんなに大きな意味を持っているか。それを示されたのは、野宿して羊飼いをしている、非常にみすばらしい人たちでした。貧しい人たちに、このイエス・キリストという方がお生まれになったという喜びのおとずれが知らされた。しかし、世の騒がしい人たち、この世적인人たちには、一切それは隠されています。神秘です。このキリストの神秘というのは隠され続けている。

イエス・キリストがこの地上に来てくださったということがどんなに大きな出来事か、どんなに桁外れ<sup>けたはず</sup>の大きな恵みであるか、このことにまず気づき、驚いていただきたい。しかし、それに気づき、驚くというのは、頭の中で考えてできることではありません。これはやはり

聖書というところに帰らなければ。しかも、この聖書というのは、万人に与えられた神様からのメッセージなんです。

理由があつて、イスラエルという小さな民族が選ばれた。しかし、イスラエルの民族が選ばれたのは優秀だからではない。旧約聖書によれば、まるでかたくなで、なかなか言うことを聞かなくて、決して素直でない。言うなれば非常にできの悪い、手の焼ける民族です。「この子は手が焼ける子だ」とよく言いますね——「煮ても焼いても食えない」とは、親はなかなか言わないでしょうけども——まあ、そのくらい、神様を手こずらせ困らせる民族。しかも、ちっぽけな民族なんです。それを神様は敢えて選ばれた。そして、訓練された。そして1300年ほどたった後にイエスという方が生まれた。その次第が、先ほどのルカ伝の第2章に書かれていた。

イエス・キリストがお生まれになったということの深い意義を本当に知ろうと思えば、それは旧約聖書にさかのぼらなければならぬわけです。旧約聖書は、創世記からはじまりまして、実に分厚い書です。歴史があり、それから、律法があり、あるいは文学が入っていたり、いろんなものから成り立っている書物ですけども、ざつと言えば、イスラエルの民族史です。民族の歴史という面が非常に強く出ていて、しかも、それが単なる民族の歴史ではない。イスラエルの民というのは、本当に神様と格闘した民です。真剣に神様と取っ組んだ民。アブラハムから始まりまして、アブラハム、イサク、ヤコブ、ヨセフ、そしてやがてモー

セが現れる。そして預言者たちが現れる。しかも、何のために格闘したかと言うと、目に見えない神様を信じ抜くためです。

「私以外の者と絶対に浮気するな。私だけがおまえたちの神である。諸々の神々、特に偶像に心を寄せず、私だけを頼りにして歩いてこい」

そう人間に言う、目に見えない神様。見えないものを信じぬくというのは、人間にとって非常に難しいことでしょう。何でも形を作りたいわけです。お宮さんを作りたい、仏像を作りたい。その他、諸々の形を作つて、それに寄りすがりたい。これが人間の本性なんです。

でも、旧約聖書に現れた神様は、

「神殿なんかいらん」

と言つておられる。ダビデが神殿を造ろうとしたけれど、神殿なんかいらないと。人間が手で造つた宮に住まわれるような、そんなちっぽけなお方じゃない。万物の創造主であり給う神、これはいうなれば大空を住処すみかとしている、永遠なる広大無辺なる、神様なんです。それが人間が造つた宮になんか住めるものかと、そういうことが書かれている。後世には神殿宗教というものができあがつていきましたけれども。

## 言の宗教

それから、目に見えない霊なる神様、それが言ことばをもつて人に語りかける。これも大きな特



色です。言葉をもつて語りかける。だから、聖書は、大きく言つて、言の書です。「キリスト教とは何か」と聞かれると、「言の宗教だ」と言つていい。言葉を大事にする。なるほど、仏教というのもの、ものすごい仏典というのがある。お釈迦様が語られた言葉が書き記されているけれども。旧約聖書は、アブラハム、モーセをはじめ、代々の預言者を通して語られた神の言が民族の歴史という形で残されている。しかも、その言というのが、人間の生きる道を示している。ただ、残念ながら人間は神様の言を、

「何々すべし、すべからず」

という律法として受けとつてしまいました。キリストもその律法の中に生まれた。

しかし、律法というものを本当に生かさうとされたのは、イエス・キリストというお方なんです。それで、その律法に固執している宗教的権力者たちによつて弾劾され、「律法を破つて神を冒瀆した」という罪を着せられて十字架につけられる。

キリストは、ヨハネ伝を見るとわかりますけれど、

「私は神様から遣わされてこの世にやつてきた。自分から自分の意志で出てき

たのではない」

と言つておられます。

「私を遣わし給うたお方」

と、神様のことを言つておられる。マタイ伝やルカ伝を見ますと、イエスは「父よ！」と呼んで祈つておられる。我々がつかむことのできない神様を「父よ」と親しく呼んで祈つておられる。そういうお方なんです。

「父よ、御名があがめられますように。あなたの御心が天に成ることく、私を通してあなたの御心を地に現してください」

それだけを祈りとして生き抜かれた。その父の御心はどこにあつたかというのと、

「人を生かせ。人はこのままでは滅びてしまう」

と。皆さんの中で、

「自分はキリストの救いなんかいたただかなくても、永遠の生命者である。地上の命がなくなつても自分は永遠に生き続ける。しかも天の世界に生き続ける」

と、そう断言できる人なんてひとりもないはずで。

イエスはヨハネ伝で、人々との問答の中で言つておられる。

「もし、あなたがたが私という人間をしつかりとつかまえなかつたら、あなたがたはそのまま滅びていくよ。それでいいのか。私はあとしばらくの間しか地上にいない。それなのに、あなたがたは私を殺そうとしている。あなたがたは、土から生まれて土に帰っていく。そのような運命ではないのか」

と。土から出て土に帰る。創世記ではアダムとイブのお話がある。人は土塊から造られた。

「神様が土から人の形を造って、そこに命の息を吹き込まれた。それで人は生きる者になった」

という。結局、生物体としての命は有限です。しかし、その人間には、やはり、永遠というものに対するあこがれがあります。死んでたまるかという気持ちがある。だから死が怖いわけです。子供が病気になった、肉親が病気になった、ガンを宣告された。そうすると平穏な生活が激変します。それは、死によってすべてが終わってしまうという恐怖感があるからです。死で終りたくないという気持ち、そういう人間にとつての死の恐怖がある。

それから、もう一つ。罪に対しては裁きがあるということ。これは人間が良心を持つている限り、良心を持つた道徳的な存在である限り、誰が何と言つても人間に刻みつけられています。善悪の判断を自らしたり、自ら悪とするもの、自ら否定すべきもの、そのようなことを行ふなら、罰や裁きがあると考える。人の目はごまかすことができて、神の目をごまかすことはできない。

仏教の方では、閻魔さんというのが居てくれるそうですね。人間はうそつきだから、舌をひっこ抜くとか、針の山があるとか。人間に地獄の描写をさせたらすばらしい地獄を描く。でも、天国の姿はなかなか上手に描けないそうです。そのくらい、人間というのは、一方では死が怖い。裁きが怖い。たたりが怖い。

皆さんはいろんなことをやるときに、方角を気にしたり、結婚式をするのに日を占つても

らつたり、いろんなことにこだわるのは、やはりたたりが怖いから。いろんなものに恐れを持つてゐるわけです。どんなに強がりの人でも縁起を担いだりする。人間の恐れ的心。縛られている心。一皮剥げば、決して自由ではない。そういう人間です。

それに対して本当の人間というのはそういうものじゃない。本当の人間とは、永遠の生命者です。神様と一緒に生きる生命、それは神様からだけやってくる。それを我々が頂けば――体は地上で滅びていく、でも体が滅びた後に――すばらしい霊の体が備えられている。

霊の生命が成長していく。これがやがて御国を受け継ぐ。そういう天の世界がある。

## 光と闇

霊の世界は光と闇です。霊の世界は、光の御国、それから闇の地獄。これは厳然としてあります。光が届かないところが闇です。光のあるところには暗さはありません。我々はみな光を慕う。夜、我々が生活していて突然停電が起けると、我々は右往左往します。何も見えない。そして、朝が近づいてくるとほっとするわけです。朝日が射し込んでくる。光がある生活。光のない生活というのは耐えられないと思います。穴蔵生活というのは耐えられない。ヨハネ伝に何と書いてあるかというと、

「せつかく光がやって来たのに、人はその根性が曲がつているから、行いが悪  
いから、光に来ようとしないで闇を好んで行く。そのことが実に裁きである」

と書かれている。

「神様はみずから裁こうとはなさらない。せつかく光を与えよう、永遠の生命として生かそう、愛を与え本当の命を与えようとしておられるのに、それを拒んで闇を選ぶ。みずから死を選び、闇を選び取っていく、そこに裁きがある」

と、はつきり書かれている。光でなく闇を選び取るというのは特殊な人だけじゃない。気がついてみると、我々人間は、多かれ少なかれ、神様に対する反逆の気持ち、自己中心の気持ち、「己おのれが主でありたい、己を神にしたい、己を立派にしたい。できることなら神様になんか頼らないで自分たちで永遠の天国を創つくりたい」

という欲求を持っている。これが、「言い逆さかい」ということです。先ほど、

「言い逆さかいの徴しるし」

と書いてありました。

「剣つるぎが、マリアさん、あなたの胸を刺し貫つきますよ。それは人の心に潜ひそんでい  
る言い逆さかいの思いが具体的に現れてくる。それがあなたの胸を貫つくんです」

と。これはイエス・キリストの負い給うた十字架をあらわしています。キリストはみずから十字架についてくださった。キリストは、十字架の上で決して人々を呪われなかった。

「父よ、彼らを許してやってください。彼らは自分で自分のしていることがわ  
からないのですから」

と執成とりなして祈ってくださいました。そんなお方がこの世の中にあるかという。私は、観念論で

「神はある。神はない」

とか、そんなくだらん議論はいたしません。キリストという紛まぎれもない霊的な人格。そのお方は、かつて天界のいちばん高いところに神と共にいらつしやった。そのお方が、時満ちて地上に生をお受けになった。

そのいきさつが、先ほどのルカ伝の第1章に、処女マリアに聖霊が宿おとめられて、そしてみどりごととなつてお生まれになったという。これは人の知恵ではわからないことです。全く神秘としか言いようがない。こんなことは、科学では絶対に説明できない。マリアさんは、本当にとまどった。けれども、天使ガブリエルから、

「あなたのおなかに宿る方は聖なる方である。聖霊によって身みごもる。だから、  
おそれずに大胆にいきなさい。これは神様の御心みこころなんだ」

と告げられた時、マリアさんは、

「はい。私はまだ男の人を知らない身です。でも、御心ならばどうぞその御心  
が成りますように」

と、天使の前にその身を委ねました。祈りました。マリアさんのその従順。私は、その後のマリアさんは辛かったと思う。夫ヨセフを知らないのに、おなかがだんだん大きくなってくる。これは、人間的な次元から見ますと、もう大変な苦しみです。それをマリアさんはじつ



と耐えて、そしてエリサベツという遠縁にあたる方をユダの山里に訪ねて行く。エリサベツに何か相談したかったのでしょうか。その時、エリサベツは、ヨハネという方を胎に宿して6か月になっていた。マリアさんの「こんにちは」という挨拶の声が聞こえた時に、エリサベツのお腹の中のヨハネは小躍りして喜んだと聖書に書いてある。もう6か月になっていますから。そしてその時、エリサベツはもう年老いていますけれども、聖霊に満たされて、

「ああ、主の母が、イエス・キリストという主になる方のお母様が、この山里まで私を訪ねて来てくださった。私は何と幸せな女性でしょう」

という賛美の声をあげた。それに触発されて、マリアは賛美の歌をうたいます。それが「マリアの賛美」として、ルカ伝の第1章に美しく書かれている。

「このような者をかえりみてくださった神様は、何と恵み深いお方でしょう。神様は、力ある者、おごれる者、権力者たち、富める者たち、そういったこの世で権勢を誇っている者たちをその座から引きずり降ろし、しいたげられている者、貧しい者、病に苦しんでいる者、そういった者に本当の救いを与え、喜びを与え、この世ならざる本当の命に生かしめてくださいます。この子はそのために神様が授けてくださった聖なる子どもです」(ルカ1・46～55)

そういう賛美の歌をうたう。そして、3か月を山里で過ごしてマリアさんは帰ってくる。

そして月満ちて、このクリスマスの誕生ということになるわけです。

こういう出来事というのは、本当に神秘の出来事でありまして、それをただ「ありがとうございます」

と言って、心に受け入れる人は本当のクリスマスを迎えたことになりますし、

「こんなものは信じられるものか」

と蹴飛ばす人はそれで終わりです。神様は決して我々に強制はなさらない。

しかし、不思議なことに、このイエス・キリストという方を心から受け入れる人はどんな人かと言いますと、決して幸福の絶頂にある人ではありません。権勢のピークにある人でもありません。金持ちでもありません。本当に、苦しんでいる人、悩んでいる人。この世で幸せか不幸かと言ったら、不幸に分類されるような人たち、そのような人たちが、このイエス・キリストにすがっている。これは本当に神様の知恵です。別な言い方をしますと、この世に希望を持ってない人たちが、このイエス・キリストによつて見事にそれを突き抜けて、イエス・キリストの喜びの世界に入れられている。当時においてそれはまだ一時的なものだったでしょう。本当の意味はわかっていなかったでしょう。けれども、イエス・キリストの周りにいた人は、みんな、そういう人たちなんです。そしてそういう人たちは、きつと後に本当のことを悟ったでしょう。

## 根源霊

イエス・キリストの誕生の次第は、ルカ伝では今読んでいただいたとおりですが、これをヨハネの福音書で見てみましょう。ルカ伝の次にヨハネ伝というのがあります。このヨハネ伝というのが、また、非常に不思議な書です。これは、歴史的順序でイエス・キリストの「伝記」を書いているのではない。イエス・キリストという方が地上で歩かれた、それは我々に何を語りかけているのか、それをドラマチックに描き出している。

歴史的な事実というのは、ルカ伝ですつと記されています。おそらく、いちばん信頼に値する歴史的記述はルカ伝だと思います。ルカという方は歴史家でお医者さんでもあります。後にパウロと一緒に地中海伝道に出掛けていった。使徒言行録（使徒行伝）というのが書かれています。これを記しているのがルカです。ですから、ルカがでたらめなことを書くはずがない。イエス・キリストの誕生のことも、自分で調べ上げて、あらゆる資料にもとづいて調べ上げて、このような物語を書いている。「テオピロ閣下に差し上げる」と書いてある。報告書です。言うなれば調査報告書というわけです。それがルカ伝です。

それに対してヨハネ伝は、時間の順序などということは捨象して、

「イエス・キリストというのは、こういうお方だった」

ということ、演劇のようにドラマチックに描き出している。だから、そういう角度からヨハネ伝を見ていただきたい。深いという点では、ヨハネは非常に深いことを我々に語りかけ

ている。もはや、ユダヤ人、異邦人という区別はありません。むしろ人間そのものに語りかけてきてくれる。それがヨハネ伝です。

ヨハネ伝第1章から見えます。文語訳の方で読めます。

「<sup>はじめ</sup>太初に言あり、言は神と偕にあり、言は神なりき。<sup>2</sup>この言は太初に神とともに在り。<sup>3</sup>万の物これに由りて成り、成りたる物に一つとして之<sup>これ</sup>によらで成りたるはなし」

こういう書き出しのとても有名なところです。「言」は、「ロゴス」という語が原語のようですが、「はじめに言があった」というのを明治の聖書では「<sup>霊いげん</sup>霊言」、

「はじめに霊言いげん」

と訳してあったそうです。あるいは「道」という語を当ててある。そういう昔の聖書もあるようです。この

「<sup>はじめ</sup>太初に言あり」

という「言」。これは霊なるキリストを「言」という語で現しているだけのことです。「太初に」というのは、万物が創られるその前。天地創造の前からいらつしやったお方が、その「言」という語で表されているお方なんです。

しかも、その方がたつたひとりかというのと、そうではない。「神」という言葉が出てくる。

「<sup>はじめ</sup>太初に言あり、言は神と偕にあり」

この「神」というお方、これがいちばん根源なるお方です。根源<sup>い</sup>、霊<sup>れい</sup>。いちばん根源なるお方。これは誰もきわめつくすことができない。このいちばん根源なる霊的な実存者、これが「エホバ」という名前で呼ばれたり、「アラール」という名前で呼ばれたり、いろんな名前で呼ばれますけれど、これはそのような名前を当てているだけのことです。その根源なるお方と一緒にいらつしやつたのが、「言」という語でいわれている霊的人格、実はキリストなんです。だから、「言」という語で呼ばれているそのお方は、「実は神なりき」と。神様と全く同じ性質、神性をおびておられる。

神の性質、神性というのは、その最も根源的なものは「愛」なんです。

### 「神は愛なり」

と言いますね。神様をもし別な言葉で現すとすれば「愛」という言葉で表すしかない。しかし「愛」だけでは不十分です。「永遠の生命<sup>いのち</sup>」と言ってもいいでしょう。「永遠なるお方」と言ってもいいでしょう。だから、「根源なるお方」というしかない。そこに「神」という言葉をあてて言っているだけです。

その根源なるお方と一緒にいらつしやつた、やはり霊的な実存者、実在者、霊的な人格。そのお方がこの地に来てくださったということです。そのことがこの第1章のところに出現しております。

### 「<sup>2</sup>この言は太初に神と偕に在り、<sup>3</sup>万の物これに由りて成り、成りたる物に

一つとして之<sup>これ</sup>によらで成りたるはなし。<sup>4</sup>之に生命あり、この生命は人の光なりき。<sup>5</sup>光は暗黒に照る、而して暗黒は之を悟らざりき」(ヨハネ1:2~5)

これは、本当の導入部です。

### 「万の物これに由りて成り」

というのは創世記に、

### 「神、光あれと言ひ給いければ光ありき」(創世記1:3)

とあります。神様はことごとく言<sup>ことば</sup>でもって万物を創<sup>つく</sup>られたというのが、旧約聖書の創世記の天地創造の記事です。言を以て創られたというそのお方が、

### 「太初に言あり」

という、このお方なんです。

だから、その霊なるキリストは、背後の根源なるお方とご一緒のようです。でも根源霊なるお方を誰も知ることができない。誰も見ることはできない。その根源霊なるお方と一緒にいた「霊なるキリスト」によって、万物は成った。この「言」といわれているお方は、その根源霊なるお方と全く一如<sup>いちにようたい</sup>一体なんです。御思いも、なさることも、一如一体。

そういう関係を我々の概念に当てはめようとしたって、わからないですよ。「三位一体<sup>さんみ</sup>」なんて言っても、それはそう言っただけのことであって、ちつともわかっていない。人間には、わかることとわからないことがあります。わからないこと

をわかれとうとするのは健気な努力ですけれども、それで「わかった」というのは自己満足です。最後までわからない。人間とはそういうものなんです。

## 神からの啓示

しかし、ここではつきりと、こういうことが書かれている。これは神様からの啓示によって書かされている。啓示によって書かかれて書いているとしか思えない。そういう根源なる方と本当に一如一体でありながら、しかも霊的人格としては別人格である。この「言」と呼ばれている霊なるお方によって万物は成った。そして、このお方は光であり命でありました。

「<sup>4</sup>之に生命あり、この生命は人の光なりき」(ヨハネ1・4)

その光なる方が世に来てくださった、ということが9節から書いてあります。

「<sup>9</sup>もろもろの人をてらす真の光ありて、世にきたれり。<sup>10</sup>彼は世にあり、世は

彼によりて成りたるに、世は彼を知らざりき」(ヨハネ1・9・10)

イエス・キリストが地上に現れてくださった。なのに人々はそのことがわからない。この方の光を見ることができなかった。

「<sup>11</sup>かれは己の国にきたりしに、己の民は之を受けざりき。<sup>12</sup>されど之を受けし者、即ちその名を信ぜし者には、神の子となる権を与え給えり。<sup>13</sup>かかる人は血筋によらず、肉の欲によらず、人の欲によらず、ただ、神によりて生まれ

## しなり」(ヨハネ1・11・13)

弟子ヨハネは地上で歩かれたイエス・キリストしか知らないわけです。ヨハネはイエス・キリストと三年ばかりでしょうけど、イエス・キリストにべつたりくっついて離れなかった。いちばんイエスに愛された弟子ヨハネ。キリストの胸によりそっていた弟子ヨハネ。そのヨハネが、

「イエス・キリストというのは、いったいどういうお方だったのか」

と顧みた。ヨハネはとも百歳くらいまで生きたらしい。パトモスの島に幽閉されていたヨハネは、天の啓示を与えられて黙示録を書いた。非常に霊的な賜物の豊かな方です。

これは私の理解ですが、そのヨハネが「イエス・キリストとはどんなお方なのか」と、つらつらと振り返って、「こういうお方だ」ということをまとめ上げて書いているのが、このヨハネの第1章なんです。歴史的順序で書いているのではない。ヨハネ福音書の第1章というのは、ヨハネのイエス・キリストを見る総決算、それがこういう形で書かれている。

だから、私たちにとって大事なことは、

「<sup>14</sup>言は肉体となりて我らの中に宿り給えり、われらその栄光を見たり、実に父の独子の栄光にして、恩恵と真理にて満てり」(ヨハネ1・14)

本当に見る目のある人がイエス・キリストを見たらこういうお方だよと。しかも、

「このお方は、かつて父とともに天の御座にいました方だ。そのお方が我々と同じ

姿をとってこの地上に現れてくださった。このお方を本当に受けとった者は、最早、この地上の遺伝的な生まれがどうであれ、家系がどうであれ、貧乏であろうが金持ちであろうが、そういうことと全く関わりなく、ただ神によって生まれる。新たな誕生をさせていただく」

と。それは全く上からの恵みです。そんなことは、我々のこの地上の世界ではあり得ないことなんです。

この世界は、皆さんの就職でも何でも履歴書を出す。両親はどうだ、学校はどうだ、学校の先生方の推薦状を出せ。秀才か鈍才か、試験は何回くらい落っこちているか、それで決められてしまうのがこの地上です。結婚する時だつて、皆さんそうでしょ。うちの家になんか嫁かどうとか。この地上のさまざまな価値基準で人を選別して、受け入れて、やつとこさ結婚して、また離婚する。親に押しつけられた結婚だったからと言って、当人は離婚する。恋愛結婚した人だつて、わからなかった事がいっぱい現れて来たからといって、また離婚する。要するに我々は、この世の価値基準ですべてを判断している。人を選別して、受け入れたり拒絶したりしているんです。

これに対して、神様の価値基準というのは何かというと、

「このイエス・キリスト、この方を受けとるかどうか」

ということです。すべての今までの地上的な価値判断、どんなにマイナスと評価されようが

プラスと評価されようが、そのような地上の評価はどっちだつていい。天の次元では、全く別の価値基準が働いている。それは、

「このキリストというお方を受け入れずにはいられない。この方を受け入れずして自分の中に生命はない。自分は神様の前に立てるような立派な人間じゃない。自分は、もし神様の裁きがあるなら、裁かれて当たり前だ。そういうことを本当に知っている者。自分の中には光がない、自分は闇だ」

そのことを本当に知っている者。光を求めて夜泣いている幼子。おきなこそういう者がこのお方を受けとることができる。そのお方を受けとつたら、そのお方は闇を光に変えてくださる。そのお方が来たら闇は消えてなくなってしまう。まばゆく輝いている。夜も昼のごとく輝く。そういう世界をもたらせてくださったただ一人の人格。それがイエス・キリストです。

## 私を遣わし給うた父

私は本当に思うんです。イエス・キリストは、いったい、何の義理があつて地上に来てくださったのか。我々は因縁因果いんねんいんがで生まれています、この地上に。人の欲によって生まれています。いろんなだろどろしたものをみんな背負いながら、生まれて来ている。さかのぼれば限りないそういう因縁因果の中で、業ごうというものを背負つて生まれて来ている。このイエス・キリストという方は、そういう我々を救い上げようとして、父の御心みこころに従つて地に降くだつてき



てくださった。イエス・キリストは、地に降るべき何の義理もない。義理人情と言いますね。「あの人に自分は義理があるからこれを果たさねばならない。あの人にご恩があるからこれを果たさないとおれは死ねない」

とか。人間にもいいところがある。そういうふうに義理人情に厚い。

でも、イエス・キリストという方は、我々人間どもに對して、何らかの義理人情のゆえにここに來なくてはならないというような必然性は、何もないんです。そうでしょ。みんなが「來てほしい」と言ったって、

「何で私が行かなきゃならないんだ。行つたって地上はろくなことがない」

と。それも、みんなが大歡迎して、本当にこの人の言うことをハイハイと聞くのなら、それは來てもいいでしょう。それが、來てみたら、みんなで踏んだり蹴つたりで、最後は十字架です。こんな損な役回りを誰が引き受けますか。頼まれて頼まれて、頼むから來てほしいと。それで來てみたら、みんなで足蹴にして知らん顔している。それでは呼んだ人を恨みたいわね。呼んだのは誰だと怒りたいですよ。

ところが、誰が呼んだか。確かに、人の心にうめきがあつたでしょう。人の心にある、

「助けてほしい!」

という呻きがあつた。それを神様は聞き届けて、イエス・キリストを遣わしてくださった。

神様が人を遣わしてくださったのは、さあ何回あるでしょうか。ひとつはモーセです。モー

セがエジプトに遣わされた。エジプトで苦しんでいるイスラエルの民がたまりかねて叫んでいる。その叫びが天に届いた。そこで、神様は、イスラエルから離れたミデヤンの地で遊牧生活をしていて、実にしあわせな生活をしていて80歳のモーセを捕まえて、

「おまえはあの民族を救いに行つてやつてくれ」

と、神様は頼まれた。そして力を与えてパロのところに遣わした。エジプトの苦しみから民を解放するために。これが一回あります。

それから、もう一回は、ユダヤの人たち、特に主だった人たちがバビロンに捕らえられて嘆き悲しんでいた時に、ペルシャ王クロスを遣わして50年ぶりにユダヤの人たちをエルサレムに帰らせた。

それから、第三回目、しかも決定的なものが、イエス・キリストを天から遣わしたこと。これは、神様がみずからの御旨によって、イエス・キリストを地に送られたんです。

そのキリストが遣わされるということが、旧約聖書でずっと預言されている。だから、キリストの言葉を福音書で見ますと、全部、預言されている。

「この預言がこのことによって成就する」

というようにことが特にマタイ伝では何度も出てきます。キリストというのはそういうふうにして神様によって遣わされたお方です。ヨハネ伝を見ますと、キリストはご自分のことを、

「遣わされた者」

と。神様のことを、

「私を遣わし給うた父、私を遣わし給うたお方」

と、そういう言葉で表しておられる。キリストは、自分を遣わし給うたお方の御心だけに従って生き抜かれたお方です。その御心は何かというところ、

「人々を生かしてやつてほしい。人々に永遠の生命をやつてほしい。このままでは滅びだ、闇だ。闇が深まるばかりだ。だから、その闇の中におまえは行つて、光となつてほしい。愛なき世界に愛をもたらししてほしい」

と。その御心を受けとつて地に現れてくださったんです。

### 荒野の試練

そして、マタイ伝、マルコ伝、ルカ伝の三つの福音書に書かれています「あらの荒野の試練」、それを通つて伝道を始められた。荒野の試みのところも非常に大切なところです。イエスはヨルダンで洗礼者ヨハネからバプテスマを受けられます。ヨハネは、

「いや、あなたは、私から悔改めくゐあらたのバプテスマをお受けになるような、そんな

お方じゃない。私の方があなたから霊のバプテスマをいただきたいのに」

と言つて断る。けれどもイエス・キリストは、

「いや、今は受けさせてほしい」

と言つて、ヨハネからバプテスマを受けるべく、ヨルダン川に身を浸ひたされた。ヨルダン川というのは、地球上でいちばん低いところを流れている川だそうです。そのいちばん底に身を沈められたということは、いちばん底に立つて人々の罪を背負つておられるという、その姿がそこに現れている。悔改めくゐあらたの洗礼と言いましても、人は心の底から本当に悔い改めることはできない。一時的な悔改めはできましても、本当の悔改めはできない。そういうできない悔改めを、キリストがみずから川底に身を沈めることによつて、引き受けてくださった。そして、水から上がられて祈つておられると、天が開け、聖霊が鳩のごとく降くだつてきた。

「これは我が心にかなう者、わがよろこぶ子」

という御声が聞こえてきた。洗礼者ヨハネはそれを聴きました。

そういうようにして祝福されたイエスが次に迎えた試練は何かというと、聖霊に導かれて荒野で四十日四十夜を過ごされる。そして四十日四十夜が満ちて、本当に飢えを覚え極限的な状況になった時に悪魔がやつて来て、

「おまえは神の子だろ。神の子ならば、そこらにころがつている石を

軽石のような石で玄米パンに似ています、

おまえが神の子なら、石に命じてパンにしてごらん」

そういう誘惑をしかけてきた。それに対してイエスは、

「人が生きるのはパンのみによるにあらず。神の口から出るひとつひとつの言ことば

で生きる。神の言は生命である」

と。肉体の極限状況においてもなお、

「人が生きるのはパンではない。本当に生きるのは神の言によってである。神の言には生命がある」

と言つて、悪魔の誘惑を一蹴された。それから、悪魔はイエスを宮の頂に連れて行きまして、『ここから飛び降りてごらん。旧約聖書の詩篇に、『天使たちが寄つてきてあなたを支える。決して足を打ったり、骨を折ったりすることがないように、あなたを支える』と書いてある。あなたは神の子だろ。高い塔の上から飛び降りてごらん。そうすれば天使が支える。人々はびっくりする。そういう奇蹟をとおして人々を引き寄せたらどうだ」

と。これに対してイエスは、

「神を試みてはならない」

と応じた。神様は、ひたすら信頼するお方であつて、人間の側から神をテストするというのは神様に対する非常な冒瀆です。それを断固しりぞけられた。

それから、三つ目に書いてあることは、山の頂に連れて行つて、

「地上を見下してごらん」

と。今だったら夜はネオンが輝いていますね、きらきらと美しい。当時はそのようなものは

なかった。だから昼ひなかのことでしょう。

「私にひざまずいてごらん。そしたら、この地上の富や権力をすべてあなたに差し上げる。どうだ」

今の政治家の方々だったら、よろこんで手をつなぎますね。まずこの地上を自分の手中におさめて、それから自分の理想を実現しようとする。自分の理想を実現するためには手段を選ばない。政治家だけじゃありません。われわれの日常はいろんな誘惑が満ちている。「こういうことをしてごらん。そうしたら、あなたは、すいすいとい行けますよ」と、あらゆるところに誘惑は満ちている。「目的のためなら、手段は少々やばくてもいいんじゃないですか」と。悪魔のその誘惑をキリストは断固しりぞけられた、

「ただ神のみが主だ。神のみを拝せよ」

と言つて。

だから、キリストが歩かれた道というのは、実に狭き道です。この世の知恵だとか、力だとか、霊力だとか、そういういたものは一切手を結ばない。まず奇蹟というようなことで人を引きつけたりしない。神の言だけ、神の御心だけ、それに自分を捧げて行かれる。そういう生き方です。キリストが地上でなさった癒しのわざとか、もろもろのよきわざも、

「これは父が私の中で『せよ』とおっしゃっているからしている。自分の勝手な思いでは、していない」

と。だから時には、

「人にしゃべるな」

ということは何度も言っている。奇蹟のための奇蹟なんか絶対になさらない。いわば、神様の愛に迫られてなさっている。神様の生命と愛は、そういう形で現れざるを得なかった。そういうふうにはしか表せなかった。しかし、それが時の宗教家や権力者には、非常に危険な行いとして映ったわけです。人々がぞろぞろとついて行く。しかも、安息日にそのようなことをなさったから、「これは律法破りだ」と。しかも、

「神様が私の中で御<sup>み</sup>わざをなしておられる。私は、自分からは何もできない。

私は自分から何も語ることはできない。私はからっぽだ。神様がすべてだ。神

様が私の中に充滿して、語るべきこと、なすべきことをことごとく示しておられる。私はそれに従っているだけだ。私と父は一つである」

と言っておられる。さつき、一如一体と言いました。霊界において神様と一体でおられた方が、地上に降りてこられている。降りてこられたその方は、絶えず祈っておられる。絶えず祈り続けておられる。祈りの中で本当に一如一体が成就している。だから、あのようなすばらしいわざが展開していくわけです。イエス・キリストという方ほど、父の御心のみに生き抜かれた方はいらつしやらない。

## 十字架・復活・聖霊の神秘の事態

けれども、人々はそのイエスに蹟くわけです。そして、最後は十字架です。その十字架も、ご自分の勝手な思いで、いわんや英雄たらんとして十字架に架かられたのではない。神様の御心ゆえに十字架に架かられた。ゲッセマネの祈りというのがありますね。

「本当にこれが御心<sup>みこころ</sup>なんでしょうか。人々を救いあげるためには、これ以外に道がないんでしょうか。どうぞ、あなたの本当の御旨<sup>みむね</sup>を示してください」

そう言ってお祈りされて、その額からしたたる汗が血の滴<sup>しずく</sup>のようであった。天使が現れてキリストを力づけたと書いてある（ルカ22・42、44）。それほどに神の子イエスが苦しみました。

しかしそこに、「十字架にかかれ」という御旨があったということで、十字架に架かられた。どんなことがあっても人々を救いたいという神様の御思い。キリストが地上で言葉を語り、愛のわざをなさる。それだけでみんながキリストにすんなり従って、神の子になつていくという、そういうのどかなパラダイスが生まれるかというと、むしろ逆であった。そのことが先ほどのシメオンの預言であらわされているわけです。それをキリストはしっかりと受け止められた。

だから、このキリストというお方は、生まれてから死ぬまで、神様の御心に貫かれていた。しかもその御心は、人に命を与え、人を生かすという愛そのものだった。その愛が十字架でもって極まるという、実にそれほどまでに人間の業<sup>ごう</sup>は深いということです。このことを、私



は申し上げざるを得ない。

しかもキリストは、私たちに何も恩着せがましいことはおとしやらない。人知れず世に降り、人知れず深く祈り、そして御わざを現し、最後はひとり孤独に十字架に身を委ね、息を引き取って父の御許に帰られた。父の御許に帰られる前に地獄にまで堕ちておられます、われわれの負うべき業を担いきつて。イスラエル民族だけじゃない。過去、現在、未来の、全人類の、あるいは全宇宙の悲しみ、苦しみ、悩み、業、そういったものを全部担いきつて、地獄にまで堕ちてくださった。そして、地獄で苦しんでいる霊どもを救いあげて、霊体となつて現れてきたのが、あの復活という事態です。

こういう神秘の事態というのは、本当にもう、「信じるの、信じないの」という、そういう次元を越えています。神様の側から我々人間に向かつてくださった、一世一代の神様の大事業と言っている。クリスマスに始まり、復活に至り、やがて50日目に弟子たちに聖霊が火のごとく降ってきたという事態。その数十年の間に起こった一連の出来事というのは、本当に神様の御思いが地に顕された、いちばん結晶した事態でありました。

どこかの地上で起こらざるを得ない。それが、たまたまイスラエルという地が選ばれただけでした。どこかで、地球上のどこかで起こらざるを得ない。神様は天界におられて、天から地上にメッセージを送って、それで人間たちが救われていくのなら、こんな幸せなことはないんですよ、お互いに。けれども、そうやって神様がイエス・キリストという方を地に送

り、御心をあらわし、御子を十字架につけ、そうまでしてわれわれを救いあげようとしておられる。その神様の極みなき愛。

旧約聖書には、しばしば「血」ということが出てまいります。血を流さずして赦しはない。血を流すことなくして生命はない。「犠牲」ということも出てきます。イスラエルの民は、自分たちの犯した罪をつぐなうために、事々に動物を屠って、その血を携えて祭壇の所に行っている。年に一回、大祭司が至聖所という所に入って行って、血のそそぎを受けてきます。これは、彼らが遊牧民なのでこのように血というものを用いるけれども、しかし、そういう遊牧民族を選び、血というものを選ぶことによって、ある啓示をなさっている。イエス・キリストの血潮というものがどんなに深い奥義を持っているかということ、数千年のイスラエルの歴史を通して示しておられる。イエス・キリストの死というのは実はこういう深い深い奥義があるんだということを示しておられるわけです。

日本人にとっては、「血」であるとか、「犠牲」だとか、「屠る」だとか、そういうしたこととは本当は受け入れたくない。我々大和民族は、稲穂を捧げ、初なりを捧げ、注連縄を張って、水で身を清めて、塩をまいてという、そのくらいで「清め」ということをしていただきたい民族です。伊勢神宮に行けば五十鈴川が流れている。その水で身を清め、それで済ませていただきたい民族です。けれども、神様の御心は、イエス・キリストというお方を通して、そ



の救いを全うしてくださった。この神秘の事態です。

それは、皆さん、五十鈴川で身を清めて、それで永遠の生命になれるのなら、そちらにおいてになったらいい。決して神様は、強制はなさらない。けれども、私はこのイエス・キリストという霊的人格に出くわした。そして、初めて本当の救いというものに触れた。それも、外側からイエスというものを見ているうちはだめでした。

イエス・キリストが霊となって私の中に宿ってくださいました。「聖霊」「助け主」という言葉がヨハネに何度も出てきます。

「私が父の御許に行けば、助け主、聖霊をあなたがたの中に送る。これが真理の御霊だ。私が十字架でああなたがたの罪の贖い、罪の清めを全うするまでは、どんなに願っても、この聖なる霊はあなたの方の中に宿りようがない」

と。弟子たちにも宿らなかつた。しかし、キリストが十字架で我々をすっかり清めてくださった。罪から解き放ってくださいました。

「我れ主と共に十字架せられたり。もはや、我れ生くるにあらず」(ガラテヤ

2・20)

このあがないの血潮をいただく者は、全部もう全うされてしまったんです。あのイエス・キリストの架かられた十字架に、私たち一人ひとりも一緒に抱き取って、一緒に十字架に架かってくださっているんです、私たちの知らないところで。イエス・キリストが十字架に架から

れた時、私たちはまだ生まれておりません。私たちはまだ生まれていないけれど、イエス・キリストは、過去の人類も未来の人類も含めて、すべての人のそういう業を背負いきつて十字架に架かられた。これが神様の中での、神様の世界での、十字架の奥義です。理性的な判断では、決して十字架の奥義はわからない。だから、「愚かな十字架」といわれています。

「十字架という言葉は、人の思いには愚かであるけれども、救われる我々には神の力なり。神の愚かさは人の賢さよりも賢い」

そういうふうにパウロは言っています。当代一の学者であつたパウロ、そしてパリサイ人である当時のユダヤ教のエリートであつたパウロ、それが復活のキリストに出くわして、光に撃たれて、がらりと生まれ変わりました。そうして、十字架の奥義を示された。

「私は十字架に架かり給うたキリスト以外のことは宣べ伝ええない。御霊の力と

聖霊、それだけに依って宣教する」

と言つて、今までの誇りも歴史も伝統も学問も全部かなぐりすてて、

「そのようなものは塵芥のごときものだ」

と言つて、ただイエス・キリストだけを伝えた。

しかも、一切の形式だとか律法だとか、そういった人間的な修養、修行、そのようなものは一切問題にならない。いかなるものを差し出しても、イエス・キリストの下さる永遠の生命、本当の命、本当の愛、これとは取り替えることができない。ただひたすらお受けするの

みです。

## 光・愛・生命

私は、今日の講筵の題に「光・愛・生命」、そして副題に「クリスマス恵みの恵み」と書きましました。私たちがほしいのは光です。光がほしい。それが、さっきのヨハネ伝のように、光が今、闇のようなこの世に来てくださった。太陽の光がありますよ。でも霊の次元で見てください。心の次元で見てください。

「私の心は光でいっぱいだ。私の霊は光に包まれている」

と、そう手放しで言える人はいないだろうと思います。内なる人を顧みれば闇なんです。イエス・キリストはそこに光となつて来てくださった。光が、実に、あなたがたの中に照り輝いている。闇は光を悟らなかつた。そうなんです。我々は、心の目を開いていただかなければ、光を見ることができない。光がいくら輝いていても、それが見えない。

パウロもそれが見えなかつた。パウロは、光に撃たれて、いったん目が見えなくなりました。三日間、物が言えず、目が見えず、そういう状態で、闇の中で三日間を過ごしました。アナニヤという人の按手あんしゅをとおして目が開かれ、目から鱗うろこのごときものが落ちた。心の目が開かれた。その時に光が差し込んできた。いったん光に撃たれて真っ暗になったパウロが、三日後に本当の光の中に入れられた。

ヨハネ伝第9章に、生まれながらの盲目の乞食のお話があります。道ばたで物乞いをしてゐる時にイエス・キリストが通りかかられた。弟子たちは、

「この人が生まれながらにして目が見えないのは、いったいこの人の罪ですか。」

親の罪ですか？」

とイエスに聞いた。ユダヤでは、「不幸なことは必ず罪の結果だ、罪の裁きだ」と受けとられていきますから——らい病でも何でもみんなそうです——だから、弟子たちはすかさず、

「この人が、目が見えないで路傍で物乞いをしているのは誰の罪なんですか？」

とイエスに聞いた。イエスは、

「この人の罪でもない。親の罪でもない。ただ、神の御わざがこの人の上に現れるためである」

と。そして、地に唾つばきして、その唾で泥をこねて、その泥を目の見えない人の両目に塗って、そして何と言われたか。

「向こうにあるシロアムの池、遣つかわされたる者の池に

神様から遣わされたる者の池という名前の池、

そこに行つて目を洗ってきなさい」

と。その盲人は、素直に「はい」と言つて、手を引かれて、そのシロアムの池で目を洗った。そういうお話がヨハネ伝にある。大騒動になりました。成人した人が、それまで盲目だった

のが見えるようになった。人々と語り合って、喜びにあふれているわけです。それで、人々はパリサイ人に告げ口をした。

「イエスという人がこんなことをした。しかも安息日にやった。けしからん」

と。そして、いろいろと、その盲目だった人との問答が記しるされています。

それで、その目の見えなかった人は、

「おまえはあの人のことをどう思うか。あれは安息日を破った罪人つみびとに違いない」と訊きかれると、

「とんでもないことです。神様は罪人つみびとの言うことはお聞きにならないけれども、神の御心を行うそのお方の祈り、願いに必ず応えてくださるお方です。いまだかつて、生まれながら目の見えなかった人の目を開けたという人のことを聞いたことがない。このお方は神から遣つかわされたお方に違いない。あなたがたも弟子になられたらどうですか」

と、そう言うんです。そこでパリサイ人たちは怒りまして、

「おまえは罪人でありながら私たちに教えようとするのか!」

と怒って、この人を除名して追放した。このことを聞いたイエスは、盲目だったその人を訪ねて行って、出会って、何と言われたか。

「おまえは人の子に出会いたいのか?」

「人の子」というのは、神様から遣わされて来るメシヤです。盲目だった人が、

「はい、そのお方に出会い、信じたいです」

と答えると、

「今、こうやって向かい合って語り合っている私がそれだよ」

とおっしゃっている。その人はよろこんで、

「はい、私は信じます」

と言つて、その場に平伏ひれふす。イエスはそれから何とおっしゃったか。

「私が来たのは、見えない人が見えるようになり、見える人が見えないようになるためである」

そういうことをおっしゃる。

「見えない人が見えるようになる。見える人が見えないようになる」

というのはどういうことですか。

「私の心の中は闇だ。私は、肉眼は見えているかもしれないけれど、神様の世界も本当の世界も何も見えない。霊の目は見えない。闇だ」

そう自覚している人がこのイエス・キリストにぶつかったら目が開かれる。ところが、

「私は見えている。光なんかいらないよ」

と言っている人は、「見える人」です。その人は見えなくなる。パリサイ人が聞きました。

「じゃあ、私たちも見えないんですか」  
と。イエスは、

「そうだよ。あなたがたは、見えると言っているところに罪がある」

そう言われたという問答が出ている。これはすばらしいところだと思いますよ。イエス・キリストのなさっていることのひとつひとつに、深い奥義がある。その奥義の鍵を解かしていただくのは、これもまた恵みです。

そして、光。その光は我々の闇の世界に、実に闇の中に来てくださるのに、闇はそれを悟らない。依然として自分の闇の中に閉じこもっている。その闇を破って光となって、我々の胸の扉を叩いてくださっている。これが、神の言<sup>ことば</sup>、我々に対する福音の語りかけです。これに、

「はい、ありがとうございます」

と言ってそれを受け入れた人は、血筋によらず、肉の欲<sup>ねがい</sup>によらず、人間的な価値とは無関係に、神の恵みによって新しく生まれる。神の子となる権を与えられる。そして我々は、このイエス・キリストという方によって、恵みに恵みを加えられる。律法はモーセを通してやって来た。道德の世界ですね、それはモーセを通してやってきた。しかし、それでは人は救われなかった。いよいよ闇の深さが増すばかりだった。偽善者を生産しただけだった。律法がなければ好き勝手なことをやっていて、それで済むんです。でも、

「神の御心はこれだよ、神はこれを望んでおられる」

という戒めが来ますと、人はそれに対してどうしても引つかかる。だからうわべを繕<sup>つくろ</sup>う。そういうことで、律法によつては、人はどうにもならなかった。律法はモーセを通してやって来たけれども、その後にはいつしやつたイエス・キリストは、恵みと真理<sup>まこと</sup>、愛そのものの、神様の無限無量の愛です。これはイエス・キリストを通してやってきた。いまだ神を見たものは誰もいない。けれども、神の懐<sup>ふところ</sup>にいます独子<sup>ひとりご</sup>なるイエス・キリスト、この方のみが神をあらわし給うた。これが、ヨハネ伝第1章4節から18節なんです。ヨハネ伝のはじめであり、まとめであると言っている。

## 弥陀の本願

それから、洗礼者ヨハネのことが出てき、イエスがどのようにして弟子たちに出会ったかということが出てくるけれども、時間の関係でそこまではお話できません。洗礼者ヨハネは、

「これぞ、世の罪を除く神の羔<sup>こひつち</sup>」

とイエス・キリストのことを言っています。世の罪を除く神の羔。しかも、世の罪を除くということが十字架なしではあり得なかったということが、先ほどから申している人間の業<sup>わざ</sup>とということです。

お釈迦<sup>しやか</sup>様の世界は、大悲大慈で救ってくださる実<sup>み</sup>にありがたい世界です。お釈迦<sup>ねはん</sup>様が涅槃<sup>ねはん</sup>の境地に入られる。そして、衆生<sup>しゆじやう</sup>をことごとく涅槃<sup>ねはん</sup>の境地に抱き上げようとする。願<sup>がん</sup>をかけ

てくださって、この本願が成就するまでは自分も救いにあずからないという願を立ててくださったという、まことにありがたい思し召しです。それを親鸞は受けとって、

「弥陀の本願は人を選ばれない。善人や悪人ということは問題じゃない。善人なおよく往生す、悪人においてをや」

と。善人は自分の善にすがっている。誇っている。悪人は自分の抛り所がなんにもない。そういう者をこそ救おうとなさっている。それが弥陀の本願だと。

親鸞は大変な修行をなさった方です。それでも自分の心に平安がない。そこで、法然上人の仰せに従って、ただ

「南無弥陀仏」

ということになった。「南無」というのは「祈り入る」ということです。ひたすら祈り入る。「弥陀」というのは、無量寿無量光。永遠の生命、永遠の光。「仏」というのは「覚者」。

「無量寿無量光の覚者である方に祈り入る」

ということです。お釈迦様、その方に祈り入るというこの唱名。「南無弥陀仏」というこの六文字だけに自分を委ねたのが親鸞です。教えというより生き方そのものです。そういう、弥陀の本願はすばらしい。

「では、先生はなぜキリストなの？」

と。それは、キリストはその弥陀の本願をご自分の十字架でもって実現してくださったから

です。キリストとお釈迦様では時代が違います。お釈迦様の方がずっと早い。キリストは後から来られた。けれども、弥陀の本願を本当に成就してくださったのは、キリストが十字架でもって全人類の——お釈迦様も含めて——およそ生きとし生けるものすべてを自分が背負いきった。これによって全うされた。私はそう受けとっている。仏教徒の方に、私は何もそれを宣伝したり、そう信じろと言う気はありません。けれども、おそらくお釈迦様は今、天界でキリストとお互いに、

「本当に人類というのはどこまでも手が焼ける。いつまでたつてもだめだ。あちら

こちらで戦争をやっているし、しょうがないねえ」と言っただけで思っている。

「でも、絶望しないでおうね」

と。キリストは、全く武器をとることはなさらなかったでしょ。キリストは、自分のために何一つ求めておられない。福音書をこらになつてください。ただ神の御心のみを求めておられる。しかも、その神の御心は、

「人を生かせ。愛を与えろ。死という呪いの中にある人間に本当の生命を与えて欲しい」

ということですよ。

本当に、我々が生まれながらにしてイエス様と合体できたら、これはイエス様は十字架に



架からなくて、みんなを召し抱えて天に昇ってくださったと思う。そうは行かなかったところに、業の深さがありますが、しかし、十字架が本当にもう全うされた以上は、もはや重ねて十字架というのは無い。ただ一回きり、永遠のあがないを成してくださった。キリストの誕生に始まり、その三十年後の十字架というこの出来事とおして、それまでの全人類、それ以後の全人類、全部そこに集約されている。だから、ちょうどキリストがお生まれになった時に、地上からの光が天に逆に反射して輝いていた。そのように、過去の歴史にも光が当たり、救いあげられる。そして、キリスト以降のそれからの歴史もキリストの光の中に包まれる。そして最後に終末がやってくる。その時にすべてが明らかになります。

### 太陽・空気・水・大地

しかもキリストは今も天界にあつて輝いていてくださって、私たちが心から、

「主イエス・キリストさま!」

と祈れば、いつでも私たちの傍に来てくださる。生きたお方なんです。死んだお方じゃない。今も生きておられる。

「そんなことあるもんか」

と言う方には、

「いっぺん外に出てください。太陽の光に当たってください」

と申し上げたい。太陽は何十億年前から輝いている。そして、地球上に住む一人ひとりに光が届いていますでしょ。太陽が何万kmのかなたにあるのか知りませんが、太陽というあの実在は、無言でもって、我々に光を届けさせ、照らし、熱を与え、生かしてくれている。太陽は言葉こそ語らないけれど、語らず言わずその声聞こえないけれども、しかし太陽は、神様の御心を体して、我々に命を与えてくれている。

しかし、その太陽でさえもできないことを、キリストは霊の世界の太陽となつて、してくださっている。霊界の太陽キリストです。空気は私たちを生かしてくれている。空気は私たちが寝ているときも体の中にはいりこんで、私たちの血を清め、生かしてくれている。清らかな空気なくして、私たちは生きられない。イエス・キリストの霊気、聖霊という霊気です。この霊気によらなければ、私たちの霊的人格は生きられない。清らかな水なくして我々は生きられない。聖霊は「水」とも言われます、「生命の水」とか。

この自然界で私たちが生きていくのに絶対に必要なもの、太陽の光、熱、それから清らかな空気、水、そしてこの大地。こういったものなくして、私たちは生きられない。その恩恵にあずかって今日までやってきた。しかも、人間はそれに対して何のお返しもししていない。汚すことはしても、お返しもしない。破壊することはしましても、プラスなことではない。それでも、黙って我々を生かしてくれている太陽、空気、水、そして大地。すべてを担っている大地です。

こういう見える世界で私たちを生かしているもの以上に、キリストは、見えない世界で私たちに、私たちの命以上の永遠の生命、不滅の生命を与え、生かそうとしてください。しかも、命の質は何かと言え、「愛」なんです。愛は己を捨てて人を救う。

「人、その友のために己の命を捨てる。これより大いなる愛はなし」

「自分を迫害する者のために祈れ」

と。キリストはそれを現実に実行された。言葉でなく、行為でもって、存在でもって。キリストが福音書で語られた一つ一つの言葉をキリストは生き方そのもので現しておられる。

「私とおまえは一つだよ。私がおまえたちの中に宿れば、おまえもそういう人間に、知らない間に変わってしまうんだよ」

と。自分のことが嫌いで嫌いでたまらなかつた方、自分を呪っていた方にとって、このキリストの救いの福音というのはどんなにありがたいか。

「おまえは、もう、過去のことを言わなくていい。過去がどんなにマイナスであろうと、自分がどんなに嫌な人間であろうと、自分がどんなに人を傷つけてしまうような存在であつたとしても、全部それは私が十字架で背負いきつたからね。大丈夫。そのかわり、私の中にあなたは生きなさい。私だけを見つめて、私と一如で生きるんだよ。過去を振り切つて、後ろを見ないで、ただ私だけを見つめて歩いていってほしい」

と。それが、キリストがクリスマスに私たちに語っていらつしやるメッセージなんです。

「光に向かつて歩もう。心に太陽を持て」

とか、そういう言葉がありますね。全部キリストです。見えないけれども燦然と輝いて、永遠の生命でいてくださるお方、愛そのものなるお方です。そういうお方が、あなたがた一人ひとりの中に宿つて、ご自分と同じ質に、同じ人格に変えてくださる。だから、天国に行くのは当たり前なんです、そういう人格になったら。天に属するものは天に帰って行きます。地に属するものは地に帰ります。

我々は、地に属する者であつたのに、このキリストの恵みにより、天国人にされてしまった。天国人にされてしまったのは、神の御わざなんです。あなた方一人ひとりの中で始まつた神の御わざ、これは始まつたら必ず終わるまで全うされる。

ただし、それは、すぎらないといけません。大きな顔して「勝手にしやがれ」なんて開き直っていたら、だめなんです。

「本当をお願いします。私の中にいつまでも宿り続けてください!」

と、そう懇願しなきゃだめです。キリストというお方は非常に慎み深いお方です。この聖霊という霊は本当に優しく慎み深い霊ですから、心からお願ひしないと、遠慮深くてなかなか宿つてくさいませんよ。けれども、本当に心を開いて、

「どうぞ私の中に宿つてください。とこしえまでも一緒に居てください」

とお願ひすれば喜んで宿つてくださいます。「私のような者が」とか、そういう遠慮は一切いらぬ。それは傲慢ごうまんということ。神様の方で全部片づけたのに、

「おまえはもう神の子だ」

とおつしやつているのに、

「いいえ、私はまだまだ罪びとでございます」

と言うのは、謙遜けんそんに見えて実は傲慢なんです。だからマリアさんが、「はい、御言葉が成りますように」と祈られた、その姿です。

「はい、御心が私の上に成りますように」

そう言つて、イエス・キリストをお迎えすれば、永遠に居てくださる。そういうお方なんです。こんなありがたいお方がいらつしやるだろうかということ。す。

## 南無キリスト

ですから、どうぞ、祈る時にいままでの先入観を捨てて、

「主イエス・キリストさま、自分の中に光はありませんでした。自分で自分を救うと努力しましたが、どうにもなりませんでした。この世で成功しているやつを見たら妬ねたましく思い、いろんなことでひがんだり、あるいは、うまく行けば人を見下したり、とにかく自分は嫌な存在でした」

と。けれども、そんなことはもう一切問題でないということです。

「誰でも、キリストに在るならば、新しく創つくられたものだ。旧ふるきは過ぎ去った。

見よ、一切は新しくなった。私は一切を新しくする」(コリントⅡ5・17参照)

これが神様からのメッセージなんです。一切を新しくする。お正月というのは、本当はそれなんです。過去をかなぐり捨てて、「新しい年に向かって歩みます」というのが、「新年おめでとうございます」という。でも、三日も続かない。本当にすぐ汚れてしまう。キリストの新年はクリスマスで始まります。だから、今日始まった新年、これは永遠に新しい。

「新しい」という言葉にギリシャ語で二つあるそうです。「ネオス」と、「カイノス」というのと。ネオスというのは「ニュー」ということ。それに対して、カイノスというのは、時がたつても古びない、「エーバーグリーン」なんです。カイノスの方は永遠に新しい。本当の、古びない新しさ。霊的次元の新しい生命。これを我々の中に賜たまわろうとしてイエス・キリストが来てくださった。これが、クリスマスということの本当の意味です。

イエス・キリストのご生涯を一時間ちよつとの時間でとてもお話できません。断片的にしかお話できませんでした。でも、私が語らんとすることをどうぞ受けとつて、キリストを心の中で「主しゅ」と受け入れて、そして「主さま!」というひとことだけでいい。「南無阿弥陀仏」というように、

「南無主さま、南無キリストさま、主イエス・キリストさま!」

そのひとことの祈りの中に、我々の思いが込められています。

「主さま、お願いします。主さま、ありがとうございます」

と。皆さん、朝目覚めたらまず、

「主さま、ありがとうございます。こうして今日も命をいただきました」

と、そこから始めてください。夜寝ている間に心臓が止まっても、決して不思議じゃない。私たちの体はいつ壊れたつて不思議じゃない。

「それが朝目覚めることができた。ありがとうございます。朝日が輝いている。あ  
りがとうございます」

と。キリストを深く知れば知るほど、出てくる言葉は、

「ありがとうございます」

です。それは、神様に対して「ありがとうございます」であると同時に、周りにいてくれる人々に対する「ありがとうございます」です。人は決して一人で生きていない。いろんな方のお助けによつて人は生きています。助け、助けられ、これが人間の本当の姿です。だから、どんなことにも「ありがとうございます」と。「お金を払っているから当然じゃないか」と、そんな思いは絶対に抱かないでください。それとこれとは別です。タクシーで運んでもらつて「ありがとう」、食事を出してもらつて「ありがとう」、お掃除をしてもらつて「ありがとう」と感謝する。

本当にみんながお互いに心から「ありがとう」と言い合うようになったら、どれだけこの我々の人間社会が住みよくなるか。家庭の中でもそうです、「ありがとう」と。一人ひとりがキリストに向かつて、

「ありがとうございます。私がこうして元気にいられるのも、主さま、あなたの御  
顧みのおかげです」

と。ご家族のいろんな思いがあるでしょう。気にかかることがあるでしょう。全部キリストにお委ねなさつたらいい。キリストは全部ご存じです。祈る前から、あなた方の願いを全部知つておられます。

だから、くどくど祈ることはない。でも、くどくど祈ることで気が休まるのなら、くどくど祈つてもいいよと。そういうことなんです。百万回祈ろうと思つたら百万回祈ればいい。ひとことでもいい人はひとことでもいい。祈る前からご存じだから。どんな地上の親よりも、あなたがた自身のことも、あなたがたの家族のことも、すべてをひつくるめて

「わかつているよ」

と言つておられる方。それが「霊なるキリスト」なんです。

太陽の光が地球上の何十億の人を生かしているように、キリストはもつともつと一人ひとりを生かしてくださる。そういうことなんです。

今日は、これで終わりにいたします。それでは、お祈りをして終わることといたします。

## 祈り

主さま、ありがとうございます。こうして、ここに集われたお一人お一人と本当に聖言みことばとともに喰らい、あなたのお生命いのちにあずかることができましたことを感謝いたします。

あなたは今生きて、この中に立つてくださっています。一人ひとりの背に手を置いて、

「安心しなさい。どんなことでも私に委ねなさい。私は、おまえが知っている以上

におまえのことを知り、心の思いを知り、煩わづらいを知り、全部を背負っているから

大丈夫だよ」

と。湖の上を歩いて弟子たちに近づいて来てくださったように、主さま、今あなたは霊界からここに近づき、この会場に立つて満ちあふれていくくださることを感謝いたします。

光がやってきた。闇は光に勝たなかった。光は輝いている。この光は人の命である。そして、これは愛そのものでありました。イエス・キリストという愛のかたまり。そのお方を私たちはいただき、恵みに恵みを加えられました。

主さま、イスラエルを出発点としたのですが、そのイスラエルはあなたを受けていません。かえって、我々異邦人、東洋の一角にいるこの大和民族に、あなたは関わり合いを持ってください、このようにして京都くに荘のこの会場で、あなたのご誕生を心から祝い、賛美するひとときを与えてくださいました。

この無限無量なるイエス・キリスト様を、私たちは、いかなる宗教の人であろうと、いか

なる国籍の人であろうと、そういった人間世界のあらゆる区別をのりこえて、天界の太陽のごとく、霊界の太陽として、ひたすら我々に命を与え、愛を与え、無限に生かしてください。生命の君きみとして、一人ひとりの中に迎えてくださいます。

あなたは実に豊かなる方、大いなる方。一切を包み、担にないあげてくださる方。およそいかなる宗教的な争いも、教派的な争いも、論争も、無縁なるお方であります。命そのものでいまし給うイエス・キリスト様。どうぞ今日、新しい一歩として我々一人ひとりを生み出してください、進ましめてくださいますよう、お祈りいたします。

尽きませぬ感謝と賛美の祈りを、主イエス・キリスト様の尊みい御名によって、御前にお捧げいたします。アーメン。

「光・愛・生命——クリスマスの恵み——」 2004年2月4日発行より転載